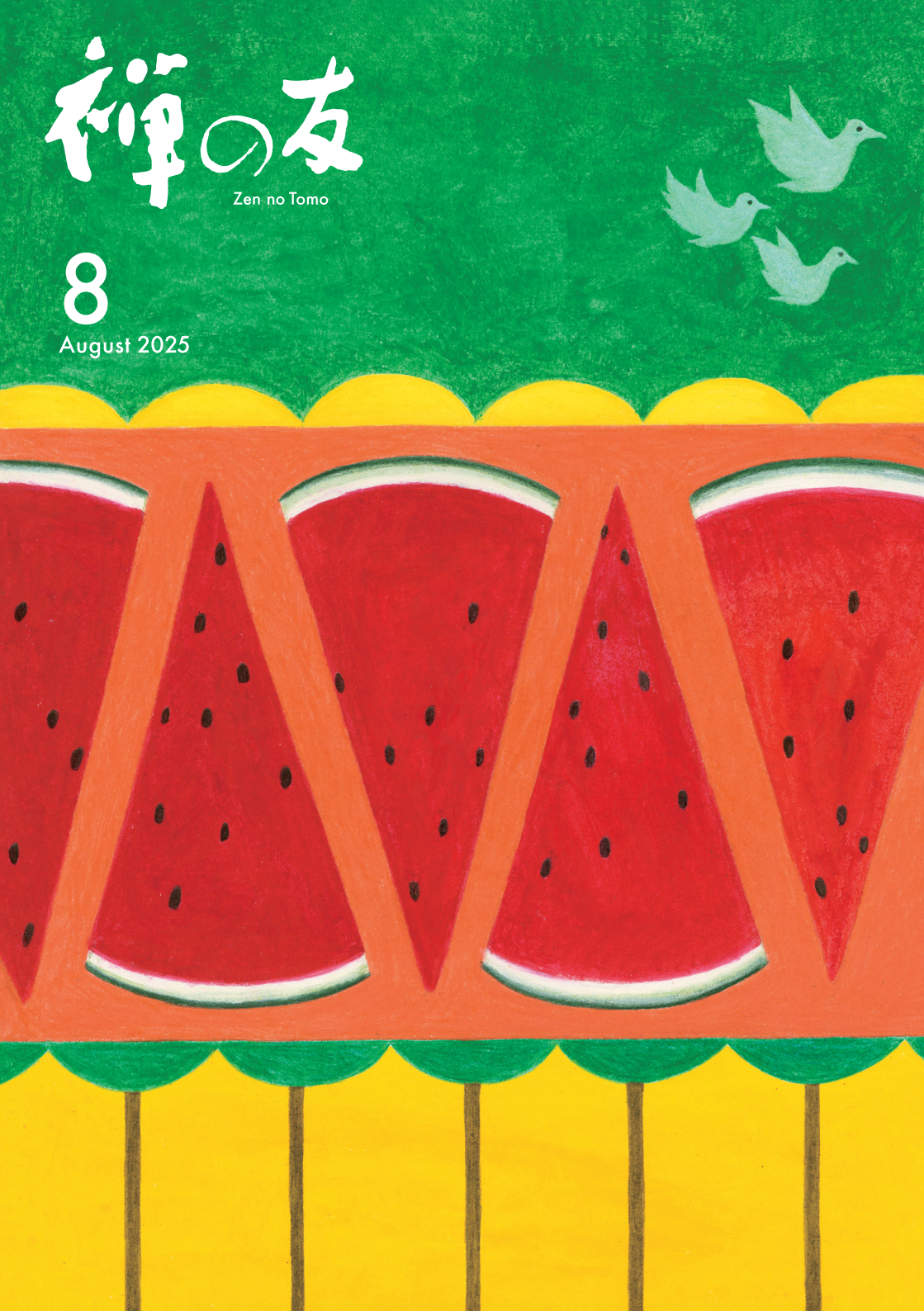
禅の友

Zen no Tomo

8

August 2025



ご本山だより
大本山永平寺【施食会（せじきえ）】

毎年八月下旬の週末には、「永平寺町大燈籠ながし」が開催されます。これは、永平寺町の主催のもと、九頭竜川の河川敷で開催される「九頭竜フェスティバル」というイベントの一つとして行われます。日中はバザーやコンサートなどが催され、夜に燈籠流しが行われます。ご先祖さまや亡き方のご供養のため全国から燈籠の申し込みがあり、毎年約一万個の燈籠がながされるそうです。その光景はとても幻想的で日本夜景百景にも選ばれており永平寺町の夏の風物詩となっています。その際、永平寺から修行僧と役寮（修行僧を指導する者）およそ七十名が会場に赴き大施食会（だいせじきえ）という法要を行い、ご先祖さまのご供養をいたします。

施食とは、すべての命に食を施すという意味です。すべてとはどういうことでしょう。私たちは多くの人や命によって生かされていることを想像することができます。しかしこれは自分が想像が出来る範囲の話です。実際に私たちを支えてくださっているのは、想像することができないほどはるかに多くの命なのです。そのすべてに食を施します。食は自分の命に直結したものであり、それを施すということは自分の命を他の命に分けることと同じです。それだけの大修行をし、併せて先祖供養をするのです。

ところで、お盆の時期になると永平寺町に限らず全国のお寺で、近隣の僧侶が集まり施食会を行い、先祖供養を行っています。なぜこの時期に行い、多くの僧侶が赴くのでしょう。それは、僧侶たちが夏安居（げあんご）を終えたばかりだからです。三ヵ月間道場に籠り、仏の行にひたすらに専念してきた僧侶たちには、最も威神力（いじんりき）（修行による力）があり最も功徳（くどく）（成仏へ導く力）が備わっていると考えられていたからです。正に永平寺の修行僧たちは、夏安居を終え最も充実した状態です。この法要の功徳により私たちに関わる全てのものが安寧であることを願っています。

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより

大本山總持寺【祖先に憶う夏】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一

大本山總持寺祖院　伝燈院

永光寺　ご開山瑩山禅師墓所

温暖化で近年、八月は連日猛暑が続いて大変過ごしにくくなりました。

「寒時は闍黎を寒殺し、熱時は闍黎を熱殺す」という禅語があります。

寒い時には徹底的に寒さに成り切り、暑い時には徹底的に暑さに成り切る。寒さ暑さを相対的にとらえて比べるゆえに、悩みや苦しみがあるのです。寒さ暑さに成り切ってしまえば、それを感じる自己もなくなり、炎熱の球場で野球に熱中する時のように、寒暑の中にあっても寒暑を感じないというのです。

八月はお盆月です。先祖を思い、父母、兄弟の在りし日のおもかげを抱くと同時に感謝の心を表していくことが供養となるのです。

この旧盆の總持寺は修行僧のほとんどが師寮寺（師匠のお寺）補佐で他出（帰省）し、山内はひとときの静寂に包まれます。

特に今春上山した修行僧にとっては初めての他出であり、半年間の修行の成果をお師匠さまや檀信徒の方々に見ていただく機会でもあります。

この旧盆の行持が終わると修行僧は本山に戻り再び修行生活が始まるのです。

また、下旬には修行僧が祖蹟巡拝で二班に分かれて、ご開山瑩山禅師さまや二祖峨山禅師さまのゆかりの場所を訪れて参拝に行きます。

曹洞 俳壇

選・坊城 俊樹

鯉のぼり男つぷりのよき泳ぎ

三重県　苅屋 奈良美

評　鯉のぼりとは通常黒・赤・青がある。その黒がお父さんを表す。この句の男っぷりが良いのは父親の勇壮なる泳ぎぶりを指すのだろう。やはり一家の大黒柱を支える父がこうではないといけないのである。しかし最近はお母さんのほうが勇壮だったりして。

夜光虫滴らしては錨(いかり)巻く

北海道　堺　隆

評　夜光虫は海水の中で青白く発光して漂っている。この光景はおそらく夜の出港の際の光景ではあるまいか。かなり大きな船が錨を巻き上げて出るところが見えてくる。作者は北海道の方なので、もしかしたら遠洋漁業の様子なのかと想像した。

◆走る子の後ろ姿を追ふ五月　愛知県　後藤 美帆

◆うららかや眼鼻おぼろな石仏　山口県　御江 恭子

◆狐狸出でよ遊び明かさん夜の桜　千葉県　甲斐 勇

◆突と現れ突と消え去り黒揚羽　岐阜県　大下 雅子

◆夕日背に軋みし竿の蜆舟(しじみぶね)　兵庫県　松井 弘子

◆嵯峨竹で垣繕ひの金閣寺　山口県　粟屋 邦夫

◆生涯を脇役女優花水木　大阪府　柏原 才子

◆野辺送り黒き背に背に桜散る　秋田県　髙橋 カツ子

◆更衣句袋も新しく　埼玉県　大西 順子

◆風薫る毛利家紋の軒瓦　山口県　藤野 祥子

選者吟

人恋し幽霊坂に蚊がひとつ

俊樹

作句小見　幽霊坂とは東京の港区にある坂。その謂われは良く知らぬが大きな屋敷があるためか人通りはあまりない。そんな薄暗い坂に一匹の蚊が淋しそうに飛んでいた。はたしてそんな坂に飛んでいても人の血を吸うことは不可能なのに。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

帰り来し我が家に心安らげり家具はそれぞれ灯を宿しゐる

鳥取県　眞山 博充

評　病むことがあって入院されていた作者だろうか。帰宅した我が家の家具が、それぞれ灯を宿していたと詠う。在るべき場所に在ることの安らぎが家具に託されている。

寺の鐘の明け六つ、正午（まひる）、暮れ六つと一日聞きて恙無く在り

静岡県　杉原 民子

評　窓を開ければ鐘楼が見えるとも詠う。日に三回の鐘の音を聞きながら作者の生活は廻っていることの安らぎ。結句の「恙無く在り」の大らかな収め方が、森羅万象の宇宙を受け止めている。

◆曖昧に自分を馴らし生きて来し我が眼に眩し白牡丹咲く
鳥取県　徳本 義則

◆復興の願ひをこめて舞ふ虎の囃子は被災の浦にひびかふ
岩手県　阿部 凛子

◆ふくらかに花菖蒲は咲きてをり田植すみたる田圃の片へ
広島県　徳永 進一郎

◆離陸してほどなく機窓に船の浮かぶ津軽海峡大きく傾ぐ
北海道　加藤 智子

◆不思議なる田の水鏡覗き込む幼と我と名も知らぬ鳥
秋田県　小松 紀子

◆白きシャツ高校生らが坂道を声かけあいて上り行くなり
静岡県　髙尾 善五

◆母ちゃんが居るうち帰るはずだったひっそり残る故郷の家
京都府　三浦 大示

◆人はみな心のうちに死者抱き死んでゆくときその死者も死ぬ
岐阜県　後藤 進

◆早朝の荒江四角（あらえよつかど）せはしなくチラチルチルチレ燕のこゑす
福岡県　三吉 誠

◆運が八割努力が二割と言いし叔父の不意に顕ちくる梅雨入り間近
兵庫県　前田 あつ子

選者詠

言葉もつ花なら何を語るらん裏のなだりのさくらほろほろ

ちづ

作歌小見　自らの暮らしと次元の違う花の存在感とを対比させた徳本さんの一首、また後藤さんの死生観の深さにも感銘しました。三吉さんの歌の「荒江四角」は作者の住まう福岡の地名で、ツバメの声のオノマトペと良く呼応しています。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。